

[研究報告]

教育観における必然と偶然

山本孝司

【要旨】 アメリカ思想は、植民地ピューリタニズムの中軸であるカルヴィニズムの運命予定説という悲観主義的ともとれる決定論が出発点となっており、その研究においても「偶然」という要素がながらく切り捨てられてきた。

しかし最近になってアメリカ文学研究において、ピューリタン文学からアメリカ・ルネッサンス、自然主義を経て現代文学へという図式で、「偶然」の強調による決定論の克服の歴史として描きなおしが試みられている。

アメリカ教育史研究においては、植民地ピューリタニズムによる教育観から超越主義者たちによるロマン主義児童尊重の思想を経由し、進歩主義教育運動にみられる革新的な教育思想へと繋がる直線的な図式で教育観、子ども観の流れが把握されてきた。その図式のなかでは、運命予定と原罪に関する厳格なピューリタンの宿命観から、神の恩寵と許しに従って、人間の自助努力による救済が可能であるとの福音主義的な救済観へと子どもの人間性と自己発展の可能性が承認されていく歴史として描かれてきた。すなわち、直接的には子どもの成長発達に限界を設定するかどうか、という形で表現されながら、それは究極的には人間形成において教育の介在がどの程度許されるのか、神による予定調和の枠外で人間形成に教育が影響し得るかどうか、という問題を含んでいたといえよう。

本稿は、必然、偶然、自由に焦点を当て、18世紀から20世紀までを、必然から偶然へのパラダイムシフトという観点で18世紀から20世紀にかけての教育観、厳密に言えば教育対象としての子どもの捉え方の変化を眺める試みである。特にそのターニング・ポイントとして19世紀のアメリカ・ルネッサンス期における超越主義の思想のなかに偶然的の称揚をみる。

キーワード：ピューリタニズム 原罪 必然 偶然 超越主義

I. はじめに一課題設定

アメリカ思想は、植民地ピューリタニズムの中軸であるカルヴィニズムの運命予定説という悲観主義的ともとれる決定論が出発点となっており、そのためにアメリカ思想に関する研究においても「偶然」という要素に注目が集まることは稀であった。

「偶然」に関する研究を年代設定別にみると、1660年以降蓋然性論が思想史に初めて登場し、18世紀には“statistics”という言葉が英語の語彙に加わり、1842年にはベルギーの天文学者ランベルト・ケトレ (Lambert A.J. Quetelet) が『人間について』のなかで偶然の法則を、人間を支配する普遍法則と定義しており¹⁾、ヨーロッパにおいては古くは17世紀よりテーマとして取り上げられてはいた。しかし「偶然」がクローズアップされることの端緒となったのは、ジャック・モノー (Jaques Monod) の『偶然と必然』 (El Hasard et la Nécessité, 1970) がベストセラーになったこ

とである。

こうしたモノーの著作に触発され、最近になってアメリカ文学研究において、ピューリタン文学からアメリカ・ルネッサンス、自然主義を経て現代文学へという図式で、「偶然」の強調による決定論の克服の歴史として描きなおしが試みられている。それはアメリカ文学史の視野から外れていたプラグマティズムをアメリカ文学の主流を流れる思想として捉え直す作業と相俟って展開されている²⁾。

本稿の目的に直接かかわる研究フィールドとしてのアメリカ教育史研究においては、植民地ピューリタニズムによる教育観から超越主義者たちによるロマン主義児童尊重の思想を経由し、進歩主義教育運動にみられる革新的な教育思想へと繋がる直線的な図式で教育観、子ども観の流れが把握されてきた。その図式のなかでは、運命予定と原罪に関する厳格なピューリタンの宿命観から、神の恩寵と許しに従って、人間の自助努力による

救済が可能であるとの福音主義的な救済観へと子どもの人間性と自己発展の可能性が承認されていく歴史として描かれてきた³⁾。すなわち、直接的には子どもの成長発達に限界を設定するかどうか、という形で表現されながら、それは究極的には人間形成において教育の介在がどの程度許されるのか、神による予定調和の枠外で人間形成に教育が影響し得るかどうか、という問題を含んでいたといえよう。

本稿は、必然、偶然、自由に焦点を当て、18世紀から20世紀までを、必然から偶然へのパラダイムシフトという観点で18世紀から20世紀にかけての教育観、厳密に言えば教育対象としての子どもの捉え方の変化を眺める試みである。特にそのターニング・ポイントとして19世紀のアメリカ・ルネッサンス期における超越主義の思想のなかに偶然の称揚をみる。

II. 「独立宣言」にみる決定論

18世紀アメリカ思想の到達点と目される「独立宣言」は、アメリカ人にとって英国からの政治的独立の碑である。「独立宣言」は冒頭からアメリカの独立の法的正当性の根拠を地上における法を超越した「自然の法と自然の神の法」に求め、さらに人間は「創造によって、誰にも譲ることのできない一定の権利を与えられている」と明らかに聖書的な神に言及している。「われわれは、次のような真理をごく当たり前のことだと考えている。つまり、すべての人間は神によって平等に造られ、一定の譲り渡すことのできない権利を与えられており、その権利の中には生命、自由、幸福の追求が含まれている。」と書き始めながら、「われわれは、神の摂理の保護を心から信じつつ、生命および財産、それに名誉をかけてこの宣言を支持することを、相互に誓約する」と結んでいる。つまり、この宣言では、個人の自由を自明のこととして奪うことのできない権利として高らかに謳う一方で、神に関して触れた箇所では「神の摂理の保護を心から信じている」⁴⁾ということを前提にしている。

周知のように、アメリカ新大陸においてイギリス人による開拓がなされたのは、1607年のヴァー

ジニアにおけるジェイムズタウンの植民に端を発する。ついで「ピルグリム父祖」(the Pilgrim Fathers)が、1620年プリマスに植民し、その後も様々な宗派が移り住んだのであるが、全体的な空気はピューリタンの宗教的信仰に強く影響していたのはカルヴァンの神学であった。このカルヴァン神学の鍵概念となるのが「原罪」(original sin)と「恵みの契約」(Covenant of Grace)である。特に人間観に関しては、神の絶対的至上性とそれに対する人間の卑小性を強調する「原罪」という観念が、行為のレベルにおける人間における主体的意志決定能力を否定した。ニューイングランドのカルヴィニストたちは、人間の救いが全く神の恩寵による自由な選択に基づくことを強調する「予定」(predestination)の教説を、「聖徒」(saint)ということばで理解していた。そのような宗教的観念のなかでは、神は人間の側の行為によらず、神自身の「恵み」により人間と契約を結び、この「恵みの契約」を守り続けると考えられていた。

アメリカにおける思想史・精神史は、こうしたカルヴァン神学への挑戦と超克の歴史として描かれるのが常である。18世紀のアメリカにおいて、ロック(John Locke, 1632-1704)の思想は、フランクリン、ペイン、ジェファソンに強く影響し、アメリカ独立戦争へと導いた。宗教に関しては、ロックの思想は理神論という形で展開する。理神論は、科学を宗教に適用しようとする試みであった。

1. ジョナサン・エドワーズ

啓蒙主義的合理主義の時代にあって、ロックの思想に触れたエドワーズ(Jonathan Edwards, 1703-1758)であったが、彼の神学思想は、神の絶対主権、神の怒り、審判を強調するカルヴァン主義的なものであった。エドワーズは、その神観においては厳格なカルヴァン主義を貫いたものの、ロックの認識論を援用して、宗教経験における意志と情動の役割を評価していた。『意志の自由』(Freedom of the Will)のなかでは、人間が罪の状態から脱して、最高善として顕現される神

を選択することは人間の道徳的義務であり、また選択せざるを得ないように予定づけられているとして、自由意志と予定説の統一を試みている。しかし、「人間は……単なる機械ではない」としながらも「神の世界で生起する善も悪も無限に賢明なる存在のよき喜びによって秩序を与えられ、規制され、制限され、決定される」のであって、「偶然によって生起する」と考えるべきではない、と述べ、エドワーズが意志の自由を認めない⁵⁾。「再び生まれている者でなければ、若者も老人も、全能の神の怒りの下で、どの時も永遠の破滅に向けられている。子どもたちが無垢のようにわれわれに思われても、ただもし彼らがキリストから離れているならば、成人と同じように、神の目から見れば無垢な者ではない」⁶⁾と述べるエドワーズにとって、子どもの宗教生活の基本的事柄は「福音的屈従」と「自己否定」とであった。とくに後者においては「第一は、人の世俗的な性を否定し、すべての世俗的な事柄や娯楽を放棄し、断念することである。第二は人の自然な自己高揚を否定し、自分の威厳と栄光とを断念し、自己自身をあげわたすことである。」⁷⁾

2. ベンジャミン・フランクリン

神による予定をカルヴァンの的に受容したエドワーズに対し、フランクリン (Benjamin Franklin, 1706-1790) はピューリタンの美德を、ピューリタニズムを永続させるためには推奨しなかった⁸⁾。彼は宗教を人間中心に考えて、人間にとって助けになるか害になるかという観点で行為の善悪を判断した。したがって、フランクリンが宗教を語る時、超越的な神を求めたり、カルヴァン主義が唱えるような人間の卑小さと墮落とに頭を悩ますこともなかった。彼のこうした態度の裏には「人間が行動力を制限され、神に許されたことしかできず、神の意に添う行為をすることを拒否できないとするなら、人間には自由、自由意志、すなわちある行為をしたり拒んだりする力はない」、「人間に自由意志のようなものがないなら、人間には功罪ともにあり得ない」、「したがってすべての人間は創造主により平等に評価されるに違いない」⁹⁾との信念があった。

宗派としてはピューリタンのなかの長老派に属し、敬虔な教えを受けて育ったフランクリンであったが、「『神の永遠の意志』、『神の選び』、『定罪』など私には不可解なものがあり、また信じられぬものもあった」¹⁰⁾と述べるように、この宗派の教義自体を絶対視する姿勢は彼にはみられない。それでもフランクリンは「例えば、神の存在、神が世界を創造し、摂理に従ってこれを治め給うこと、神のもっとも嘉し給う奉仕は人に善をなすことであること、靈魂の不滅、すべての罪と徳行は、現世あるいは来世において、かならず罰せられ、または報いられること等については、私は決して疑ったことはない。」¹¹⁾と宗教上の主義をもっていたことを全面的には否定していない。「世俗的な功利主義者」と評されるフランクリンは、現世において徳行を積むことが富へとつながるといふ、きわめて実利主義的・功利主義的思想をあらわしたが、その徳行の背景にあるのは上の彼の言にあらわされているような神の存在が前提になっていたことは疑いえない。より積極的に神の御心に叶う手段として現世の善行は、フランクリンによって高く評価されていたのである。そのことは「万物を創造し給うた唯一の神がある。神は摂理に従って世界を治め給う。神は畏敬と祈禱と感謝とをもって崇むべきである。しかしながら、神のもっとも嘉みし給う奉仕は、人に善をなすことである。靈魂は不滅である。神は、現世あるいは来世において、かならず徳には報いを、罪には罰を与え給う。」¹²⁾という彼の信仰箇条からも明らかである。

啓蒙期、すなわち理性の時代にあつて、人間の自由意志と予定説との統一を図ろうとして、最終的には救済における人間の道徳的努力を否定したエドワーズも、世俗的な善行と「神の意志」とが一致すると説いたフランクリンも根本では宇宙を統べる原理を神の摂理(必然)とみなし、人間の自由(偶然)の入り込む余地のない決定論の立場にたっている。このような決定論の下での教育に関する観念のなかでは、純理上、すべての教育的努力は無に帰されるか、過小評価をされる傾向にある。ここで描かれる人間とは、漸進的な努力を重ねて成長する能動的で自律的な姿というよりも

むしろ、自己否定の末に急激に訪れる回心体験によって「再生」される受動的で他律的な姿である。

Ⅲ. 「知的独立宣言」と超越主義

19世紀のアメリカ文学に関しては、トクヴィル (Alexis Tocqueville) の「一般にアメリカにおけるほどに精神の独立と真の言論の自由との少ない国は他にない」、「アメリカが偉大な作家をまだ持っていないとしても、その理由としては上記の理由以外に求められるべきではない。すなわち、精神の自由無きところに、文筆的天才は存在しない。そしてアメリカには精神の自由というものがないのである。」¹³⁾ という鋭い指摘がある。トクヴィルは1830年代の初頭にアメリカを訪問し当時のアメリカをつぶさに観察したのであるが、彼の指摘にあるように、当時のアメリカは政治的独立を果たしてはいたものの、思想史的にはヨーロッパ思想の移入に多くを頼っている状態であり、「精神の独立」は未だ達成されていなかった。

コンコードを拠点とする超越主義 (Transcendentalism) が、人間本性に向けての楽観的なまでの信頼を寄せる教義を説いたのはトクヴィルの評した「精神の独立と真の言論の自由との少ない」時代のアメリカにおいてであった。超越主義はいわゆる教会や牧師、信徒を持つような意味での宗教ではないが、18世紀後半から顕著になる宗派あるいは教会の分裂・分派の動きの一類型として台頭してきたことは、オールストローム (Sydney E. Ahlstrom) ら様々な研究が指摘するところである¹⁴⁾。

1837年、エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-1882) はハーバード大学の「ファイ・ベータ・カップ」の学会で講演「アメリカの学者」 (The American Scholar) を行い、これがアメリカの「知的独立宣言」¹⁵⁾ として後世に高く評価されている。この講演の冒頭で彼は次のように述べている。「私たちの依存の時代、他国の学問にたいする私たちの長い徒弟時代は、いま終わろうとしています。……ぜひとも歌われねばならず、おのずから歌いさずにはおられないさまざまな出来事や行為は起こっています。天文学者たちがいうように、たとえばいま天頂にかがやいている琴座の星が、いつかは千年にわたって北極星となるごと

く、『アメリカの人々が歌う』歌がよみがえって新しい時代を導くことを誰がうたがうことができるでしょう。」¹⁶⁾ この講演の前年にエマソンは代表作『自然論』 (1836年) のなかで「われわれの時代は回顧的である。現代は祖先の墓を建てる。現代は伝記と歴史と批評を書く」¹⁷⁾ と切り出して過去に囚われる当時のアメリカ社会を批判している。

このような過去に囚われた精神的閉塞状況からの脱出口を、エマソンは自然への参入に求めた。「森の中では、人は自分の歳をちょうど蛇が抜けがらを捨てるように捨てる。……森の中には永遠の青春がある。……荒涼とした大地に立ち、頭を爽快な大気に洗わせ、無限の空間のなかにもたげる時、すべてのいやしい利己心は消え失せてしまう。わたしは透明な眼球となる。わたしは無であり、一切を見る。普遍的存在者の流れがわたしの中を循環する。わたしは神の一部である。」¹⁸⁾ 自我の神への昇華が時間という必然の世界からの脱出を契機として自然という無限の空間で行われるのであった。このように神の域まで到達した精神は、もはやカルヴィニズムの強調する原罪を根拠とする宿命観とも無縁で、自由を謳歌することが可能となる。

その一方でエマソンは、「世界は数学的にできていて、その巨大な、なだらかな曲線の中には偶然は存在しない」¹⁹⁾、「宇宙の中には偶然もないし、無秩序もない。いっさいは体系であり段階である」²⁰⁾、「法則にしたがわぬ分子はただのひとつもなく、一方人間の精神の働きにも偶然的なものひとつとしてない」²¹⁾ と述べ、偶然を閉め出している。

宇宙を「偶然の支配する世界」と呼びつつ、宇宙の背後には「不変の原理」が潜み、その法則を見出すことを人間精神の重要な仕事として課す。

「運命を受け入れなければならないにしても、依然として自由や個人の意義……を肯定しなければならない。人間の自由も真実なら宿命もまた真実である。」と必然の世界からの解放を暗示しながら、「意志の法則よりも高い法則」がすべてを統制し、「明察そのもの、意志の自由も、高くのぼりつめていった最後の境地では、制約というもの

の従順な器官のひとつにほかならない」²²⁾と述べる時のエマソンの自由意志はかなり運命(必然)に譲歩している。

ただし、エマソンのいう「必然」とは、通俗的な必然ではなく、「荒々しくあるいは穏やかに人間を教育して、偶発的なできごとなどはいささかもないことを悟らせ、『法則』が、知的ではなく知性そのものである『法則』が、宇宙をくまなく支配していて、——人格をそなえてはいないが非人格的であるわけでもなく——言葉を侮蔑し悟性を越え、個人を溶解し、自然に生気を吹き込むが、しかも心の清い者には、おのれにそなわる全能をことごとく身に帯びてほしいと求めるものだと悟らせてくれる」²³⁾ような「必然」である。

エマソンは、上のような必然を「美しき必然」、「恩恵的な必然」と呼び、通俗的な意味で用いる「物的必然」とは区別している。「あらゆる個体のうしろで生物有機体が終わりを告げ、自由が……その前に開ける。……運命から自由への前進……人間が脱ぎ捨てた生物有機体の殻や障害物からの意志が解放されること——それがこの世界の目的なのだ」²⁴⁾とのエマソンの言には、人間の自由をも包み込んだ、その意味で物的必然の鎖から解放される可能性を含む表現である²⁵⁾。

エマソンのこうした精神態度を支えるのが、「大霊」(Over-Soul)という概念である。この「大霊」という考えには、宇宙の本性と個人の本性を基本的に同一のものとしてとらえるウパニシャッド哲学の影響がみられるが、現象界を超越して、絶対的な大霊を考え、すべての個人のなかにそれを認めようとするのがエマソンの一元的世界観である。この個人のなかの大霊という思想から、エマソンは個人の尊厳を高らかに謳い、魂の向上を唱えた。エマソンの自己信頼、個人崇拜のなかを貫いて流れるオプティミズムは、こうした大霊を核にした彼の一元的世界観と無関係ではない。宇宙の中心の自己の存在を感得するエマソンの思想は、自己信頼(self-reliance)を普遍の本質である自然と人間精神の一体化を実現する紐帯として措定し、当時の形骸化したニューイングランドの思想界にセンセーションを巻き起こしたのである。

このようなエマソンの一元的世界観とそれに裏打ちされる形で浮かび上がった自己信頼の理念は、教育の秘訣を「生徒を尊重すること」に求める、究極的には自己教育の原理を予感させるものであった²⁶⁾。彼の純理のなかでは、「美しき必然」、「恩恵的な必然」も恃めるのは自分のみという条件の下での自己決定の結果訪れる「必然」であり、「必然」という表現はとるものの、そこには多分に偶然的要素が入り込む余地が残されている。

エマソンが強調したのは、「直観による神との直接交渉」および「行動による真理の実践」であった。前者は主として「自然論」のなかで、後者は「アメリカの学者」のなかで論が展開されている。エマソンは「アメリカの学者」のなかで、人間を教育するもの、すなわち教師として「自然」「書物」「行動」の三点をあげる。

「真の学者は、行動によって経験をすぐれた思想に変える。日常生活のすべてが行動の機会である。経験を思想に変えて世界を理解し、自分自身を知ることが必要である。したがって、行動とは知性が見事な製品を作り出す資源である。」²⁷⁾と述べるエマソンは、考える人である学者の義務として自己信頼をあげ、能動的な思考と行動とを求める。もちろん、エマソンのこの言は、直接的には、ヨーロッパ文化の模倣からのアメリカ文化の独立を迫ったものであったが、こうした自己信頼と行動の強調には、後のプラグマティズムへとつながる思想的萌芽がみてとれる。

既にこの時期のエマソンは人格神に対する信仰は失っていたものの、前出エドワーズの「怒れる神の御手のなかの罪人」の代わりに、彼は人間の善を行う能力を強調し、自己信頼の要請を行ったのである。エマソンの思想は、それに触れる人によって、個人主義とも汎神論とも、自然宗教とも、道徳論とも読み取ることができる。特に「自己信頼」(self-reliance)のなかで、彼は過去に原理を作った人々はみな「活動的な霊魂」を持っており、「無条件に信頼できるものが心のなかにあつて、手を通して活動し、自分の存在するすべてを支配していると彼らは信じていた」²⁸⁾と述べる。そして彼は「自分が小さいということを悟った私に神が与えられたこの快適な森のなかで、毎日、

未来に目を向けたり、過去をふり返ったりすることなく、心に浮かぶ思想をありのままに記録すれば、意図しなくても、よく見えなくても、それは必ず均整のとれたものになることを私は疑うことができない。」²⁹⁾と述べ、さらに「私にとっては、心の法則以外にどんな法則も神聖ではあり得ない。善や悪は名目にすぎないもので、どちらにでも容易に変えることができる。正しいのはただひとつ、私の心に従っているものだけであり、不正なものもただひとつ、私の心にさからっているものだけである。」³⁰⁾と断言する。

IV. プラグマティズム——哲学的独立期

19世紀前半には、人間本性を楽観的なまでに肯定するエマソンらトランセンデンタリストの登場により、思想界は主に文学の領域で、ピューリタニズムの宿命観を超克し、人間の成長における偶然性をおおいに承認したかのように見えたが、19世紀後半になると新たなる必然性が人々の気分を支配しはじめる。南北戦争以後のアメリカ社会では、現実主義の前に超越主義に代表されるロマン主義が急速に力をなくしていった。周知のように、19世紀は近代科学がめざましい発展を遂げた時代であるが、こうした近代科学は、一方において、事実の重視、具体的経験の尊重という観念をもたらし、他方においては、「物質と因果性の領域を拡大することによって、人間の思想の全領域から、いわゆる精神と自発性を徐々に追放してしまう」³¹⁾のではないかという不安感をもたらした。

パースによって創始され、ジェイムズによって大衆化され、デューイによって確立されたと目されるプラグマティズムは、それぞれの発展段階においてかなりの違いはある一方で、どれもプラグマティズムの哲学としての共通の傾向をもっており、違った形でアメリカ人気質をよく反映しているとの見方もできる。パース (Charles Sanders Peirce, 1839-1914) は「偶然が秩序を生み出すという観念、これこそが近代物理学の礎石の一つであり」、「いついかなるときでも、純粋な偶然は残存し、世界が絶対完璧で、合理的で、整然たる体系となるまで存続するであろう。そして、無限に遠い未来に成り立つその体系のなかで、精神はつ

いに結晶と化すのであろう」³²⁾と云い、ジェイムズ (William James, 1842-1910) はさらに「決定論が未来の意志のあいまいさを否定するのは、どんな未来のこともあいまいであるわけがないと主張するためである。……だが未決定な未来の意欲とは偶然を意味する。……偶然の観念は根本において恵みの観念と重なり合う」、「善なる状態の偶然をとまなう世界のほうが、たといその偶然が決して生起しないとしてもこのような偶然をとまなわない世界よりもましである。……偶然とは……未来が過去とは違うもっと善いものとなりうる機会なのである。」³³⁾と主張し多元的宇宙の構想を提示した。ジェイムズの世界観は、世界の完成(救済)にたいして、それを必然的とみなす楽天主義でも、不可能とみなす悲観主義でもなく、蓋然的とみなす改善主義である。改善主義は、神による世界の創造と完成(救済)を信ずるが、そのためには、人間がそれぞれ自分の最善の努力をつくして神の御業に参加するという条件がついている。(世界の完成のために人間の協力を必要とする神は、もはや絶対的至上的存在としての神ではなくて有限な神でなければならない。) こうして二十世紀を目前にプラグマティズムという偶然主義哲学が樹立された。プラグマティズムは実験科学の手法において偶然性を前提とする。すなわち、目的として普遍的なものを設定することから出発するのではなく、行為のレベルで仮説が検証され、実際の効用がはかれることによって、実験過程が再構築されるようなそうした哲学である。

とりわけデューイ (John Dewey, 1859-1952) は「成長」という生命過程をなにより尊重し、それを道徳的価値の基準にしている。「……悪い人間とは、たとえこれまでどんなに善人であったとしても、いま現に墮落しつつある人である。善い人とは、たとえばこれまで道徳的に無価値であったにせよ、いま現に善くなりつつある人である。このような考えは、自分の批判を厳格にし、他人への批判を寛容にする」³⁴⁾と述べるデューイにとって、道徳的価値は、静的な結果ではなく、進歩の過程によって判断されなければならない。固定した目的ではなくて、変化の方向、すなわち

「成長」そのものが道徳的目的とみなされる。こうしたデューイの成長論が、教育の目的を子どもの外部に設定し、そこへの到達を必然として見なすこととは無縁であることは言うまでもない。

V. 結びにかえて

以上、必然と偶然とに焦点を当てることによってアメリカにおける教育観、教育対象としての子どもの捉え方を概観してきた。

18世紀アメリカを代表する思想家エドワーズとフランクリンの時代には人間の自由は必然の前に無力化され、(神の) 摂理との一致という意味で自らの意志を神の意志に委ねる自己否定が求められた。

19世紀のエマソンの思想のなかには、すべてを統制する超越的法則を設定し、そうした法則の支配する必然的世界が描かれながら、同時にそうした必然性を人間精神が認識できることによって個人の自由をも包み込んでいくような、物的必然と区別される必然の世界が登場した。エマソンにあっては自己肯定の根拠として神の摂理が解釈されていた。

子どもの成長を教育と等値するデューイの成長論にあっては、子どもの経験範囲をこえたところに「必然」なるものは存在せず、まさしくその過程に偶然の要素が多分に含まれた経験の再構成としての教育が前面に浮き出ている。

「歴史的にみて、キリスト教教育は、回心への関心と、教え育てることへの関心の間で揺れ動いてきた」³⁵⁾ というウェスターホフの言葉に示される通り、教育観の背後に伏線として流れるキリスト教的人間観をこのように概観してみると、回心と教育という両軸が浮き彫りになる。神によって予定された自由意志の入り込む余地のない世界にあっては「回心への関心」が人々の精神の大部分を占め、人間の自由(意志)が高らかに謳われるようになって以後は「教え育てることへの関心」へと関心の重点が移っていった。教育が、対象としての子どもの自由意志による「成長」と捉えられるには、本稿で概観してきたような時間的な流れを要したのである。

【注】

- 1) Boorstin, Daniel J., *The Discoverers; A History of Man's Search to Know His World and Himself*, New York, Vintage Books, 1985, p. 673.
- 2) アメリカ文学における必然のテーマを扱ったものとしては、例えばシドニー・J・クローズ編『アメリカ思想における自由と運命』、ペリー・D・ウェストブルック『アメリカ文学における自由意志と運命論』などがある。
- 3) たとえば次の研究がある。
Cubberley, 1934, Curti, M.E., *The Social Ideas of American Education*, Paterson, NJ: Pageant Books, 1959, Monroe, P., *Founding of the American Public School System*, New York, Hafner Publication, 1971, Ravitch, D., *The Great School Wars: New York City, 1805-1973*, New York, Basic Books, 1974.
- 4) "The Declaration of Independence," in Clarence L. Ver Steeg and Richard Hofstadter, eds., *Great Issue in American History: From Settlement to Revolution, 1584-1776* (New York, Vintage Books 1969), pp. 469-72.
- 5) Ramsey, Paul (ed.), *Freedom of the Will*, New York, Yale University Press, 1957, pp. 370-405.
- 6) Greven, *The Protestant Temperament: Patterns of Child-rearing, Religious Experience, and the Self in Early America*, New York, Alfred and Knopf, 1980, p. 62.
- 7) Greven, *The Protestant Temperament*, p. 78.
- 8) 特に、フランクリンの諸活動のなかには教育的意義をもつものが多く含まれている。例えば、フィラデルフィア図書館の設立、『貧しきリチャードの暦』の創刊、アカデミー設置案起草、学術協会の設立、『ペンシルヴァニアにおける青年教育に関する提案』の公表、『富に至る道』の公刊などがそれにあたる。
- 9) "A Dissertation on Liberty and Necessity, Pleasure and Pain" in Benjamin Franklin, ed. J.A. Lemay, New York, Literary Classics of the United States, 1987, pp. 60, 62.
- 10) フランクリン『フランクリン自伝』, 岩波書店, 1957, p. 133.

- 11) 『フランクリン自伝』, pp. 133-134.
- 12) 『フランクリン自伝』, p. 154.
- 13) Tocquvill, A., *Democracy in America*, New York, Vintage Books, vol.11945, pp.370,405.
- 14) たとえばオールストローム著 (児玉佳興子訳), 『アメリカ神学思想史入門』 (教文館) を参照されたい。
- 15) 「アメリカの知的独立宣言」とは、エマソンのこの講演をホームズが称えて使用した語である。Oliver Wendell Holmes, *Ralph Waldo Emerson*, Houghton Mifflin, American Men of Letters Series, 1884, “our intellectual declaration of independence”.
- 16) Emerson, R. W., *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, Vol.1, p.83.
- 17) Emerson, R. W., *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, Ed. Edward Emerson, With a New Introduction by Joel Myerson, Vol.1, New York, AMS Press, 1979, p.3.
- 18) Emerson, R. W., *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, Vol.1, pp.9-10.
- 19) Emerson, R. W., *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, Vol.6, p.81.
- 20) Emerson, R. W., *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, Vol.6, p.325.
- 21) Emerson, R. W., *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, Vol.4, pp.86-87.
- 22) Emerson, R. W., *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, Vol.6, p.21.
- 23) Emerson, R. W., *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, Vol.6, pp.35-36.
- 24) Emerson, R. W., *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, Vol.6, pp.35-36.
- 25) エマソンの必然に対する人間の自由の強調に関してはウィッチャーによる次のような推察がある。「…彼 (エマソン) は若い頃必然に服従して、心の奥底では自由を求めることができないという気持ちが強かったために、ますます自由にあこがれる気持ちが生まれた。彼は後になっていくことになる超越主義信仰の力と、そのほとんど意図的とも言えるような放縦さは、常識では全くありそうもないことに思えるかもしれないが、自らを滅ぼそうとしていた必然に依存しようとする気持ちを振り捨てる必要があったために生じたものである。おそらく若い頃の日記には、こうした兆候はみられないだろう。無益な自尊心、義務にストイックにしたがおうとする気持ち、神の摂理によって世界はそのように立案されていると信じこむこと以外に、自らの無力感を和らげる手だては何もないように思われた。」 (ステイーブン・E・ウィッチャー著・高梨良夫訳『エマソンの精神遍歴—自由と運命—』南雲堂, 2001, p.33.)
- 26) 市村尚久『エマソンとその時代』 (玉川大学出版部, 1994) 「第二章 自己教育の思想原理」を参照されたい。
- 27) Emerson, R.W., “The American Scholar,” *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, Vol.1, Houghton Mifflin and Company, 1903, p.95.
- 28) Emerson, R.W., “Self-Reliance,” *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, Vol.2, Houghton Mifflin and Company, 1903, p.47.
- 29) Emerson, R.W., “Self-Reliance,” *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, Vol.2, p.50.
- 30) Emerson, R.W., “Self-Reliance,” *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, Vol.2, p.50.
- 31) Huxley, T. H., *Collected Essays*, Vol.1, 1983, p.159.
- 32) Chares S. Peirce, *Chance, Love, and Logic: Philosophical Essays* (New York, Barnes & Noble, 1968), pp. 277, 177.
- 33) James, William, *The Will to Believe and Other Essays in Popular Philosophy*, New York, Dover Publications, 1956, pp.158-59.
- 34) ジョン・デューイ著 / 清水幾太郎・清水礼子訳 「道徳的感性の再構成」『哲学の改造』, 岩波文庫, 1983年, p.141-162参照.
- 35) Wseterhoff, J., *Will Our Children Have Faith?* (New York, The Seabury Press, 1976 (奥田和宏他訳『子どもの信仰と教会：教会教育の新しい可能性』新教出版社, 1981, p.74.)

[Study Report]

“Necessity” and “Randomness” in Educational Ideas

Takashi Yamamoto

Department of Social Welfare, Kyushu university of Nursing and Social welfare

【Abstract】

In American thought, pessimism of predestinarian theory of Calvinism that is the axis of the colony Puritanism and the determinism that can be taken are starting points. In a long time the element “Randomness” has been disregarded in the research.

However, the element “Randomness” is paid to attention in an American literary research recently. In the research, drawing is tried as a history of overcoming determinism by the emphasis of “Randomness”.

In the American, educational history research, the flow of the outlook ..an educational seeing and the child.. has been understood from an educational seeing by the colony Puritanism by the progressivism education movement via the thought of the romanticism child esteem by transcendentalists by the seen reformative educational thought and the connected straight line diagram.

This text is an attempt to look at the change in the educational seeing spent in the 20th century in the 18th century, in the viewpoint of paradigm shift from inevitability to a coincidence.

Key words : Puritanism, Original Sin, Necessity, Randomness, Transcendentalism